

虔十公園林

宮沢賢治

青空文庫

度十はいつも縄なわの帯をしめてわらって杜もりの中や畑の間をゆつくりあるいているのでした。

雨の中の青い藪やぶを見てはよろこんで目をパチパチさせ青ぞらをどこまでも翔かけて行く鷹たかを見付けてははねあがって手をたたいてみんなに知らせました。

けれどもあんまり子供らが度十をばかにして笑うものですから度十はだんだん笑わないふりをするようになりました。

風がどうと吹ふいてぶなの葉がチラチラ光るときなどは度十はもううれしくてうれしくてひとりで笑えて仕方ないので、無理やり大きく口をあき、はあはあ息だけついてごまかしながらいつま

でもいつまでもそのぶなの木を見上げて立っているのです。

時にはその大きくあいた口の横わきをさも痒かゆいようなふりをして指でこすりながらはあはあ息だけで笑いました。

なるほど遠くから見ると度十は口の横わきを搔かいているか或あるいは欠伸あくびでもしているかのように見えましたが近くではもちろん笑っている息の音も聞えましたし唇くちびるがピクピク動いているのもわかりましたから子供らはやっぱりそれもばかにして笑いました。

おつかさんに云いいつけられると度十は水を五百杯ばいでも汲くみましました。一日一杯畑の草もとりました。けれども度十のおつかさんもおとうさんも仲々そんなことを度十に云いいつけようとはしませんでした。

さて、度十の家のうしろに丁度大きな運動場ぐらいの野原がまだ畑にならないで残っていました。

ある年、山がまだ雪でまっ白く野原には新らしい草も芽を出さない時、度十はいきなり田打ちをしていた家の人達たちの前に走って来て云いました。

「お母、があおらさ杉苗すぎなえ七百本、買つて呉けろ。」

度十のおつかさんはきらきらの三本さんほんぐわ鋤を動かすのをやめてじつと度十の顔を見て云いました。

「杉苗七百ど、どごさ植えらい。」

「家のうしろの野原さ。」

そのとき度十の兄さんが云いました。

「度十、あそこは杉植えでも成長おがらない処ところだ。それより少し田でも打すつて助すけろ。」

度十はきまり悪そうにもじもじして下を向いてしまいました。すると度十のお父さんが向うで汗あせを拭ふきながらからだを延ひばして

「買かつてやれ、買かつてやれ。度十あ今まで何一つだたて頼たのんだことあ無いがあつたもの。買かつてやれ。」と云いいましたので度十のお母さんも安心あんしたように笑わいました。

度十はまるでよろこんですぐにまっすぐに家の方へ走り出いきました。そして納屋なやから唐とうぐわ鍬くわを持もち出してほくりほくりと芝しばを起たして杉苗しんぼを植うえる穴ほを掘ほりはじめました。

度十の兄さんがあとを追つて来てそれを見て云いました。

「度十けんじゅう、杉あ植える時、掘らないばわがないんだじや。明日

まで待て。おれ、苗買つて来てやるがら。」

度十はきまり悪そうに鋤を置きました。

次の日、空はよく晴れて山の雪はまっ白に光りひばりは高く高
くのぼつてチーチクチーチクやりました。そして度十はまるでこ
らえ切れないようににこにこ笑つて兄さんに教えられたように今
度は北の方の塚さかいから杉苗の穴を掘りはじめました。実にまっすぐ
に実に間隔かんかく正しくそれを掘つたのでした。度十の兄さんがそこ
へ一本ずつ苗を植えて行きました。

その時野原の北側に畑を有もっている平二がきせるをくわえてふ

ところ手をして寒そうに肩かたをすぼめてやって来ました。平二は百ひやくやくしよう姓も少しはしていましたが実はもつと別の、人にいやがられるようなことも仕事にしていました。平二は度十に云いました。

「やい。度十、此処ここさ杉植えるなんてやつぱり馬鹿ばかだな。第一おらの畑ひかげあ日影ひかげにならな。」

度十は顔を赤くして何か云いたそうにしましたが云えないでもじもじしました。

すると度十の兄さんが、

「平二さん、お早うがす。」と云って向うに立ちあがりましたので平二はぶつぶつ云いながら又またのっそりと向うへ行つてしまいました。

その芝原へ杉を植えることを嘲笑わらつたものは決して平二だけではありませんでした。あんな処ところに杉など育つものでもない、底は硬かたい粘ねんど土なんだ、やっぱり馬鹿は馬鹿だとみんなが云いつて居おりました。

それは全くその通りでした。杉は五年までは緑いろの心しんがまつすぐに空の方へ延びて行きましたがもうそれからはだんだん頭が円く變つて七年目も八年目もやっぱり丈たけが九尺ぐらいでした。

ある朝度十が林の前に立っていますとひとりの百姓ひょうしんが冗じょう談だんに云いいました。

「おおい、度十。あの杉あ枝打えだうぢさなののか。」

「枝打ぢていうのは何だい。」

「枝打ちつのは下の方の枝山刀で落すのさ。」

「おらも枝打ちするべがな。」

度十は走って行って山刀を持って来ました。

そして片っぱしからぱちぱち杉の下枝をはらいはじめました。と

ころがただ九尺の杉ですから度十は少しからだをまげて杉の木の下にくぐらなければなりませんでした。

夕方になったときはどの木も上の方の枝をただ三四本ぐらいつ残してあとはすっかり払い落されていました。

濃いこ緑いろの枝はいちめんうに下草を埋めその小さな林はあかくがらんとなくなっていました。

度十は一ぺんにあんまりがらんとしたのでなんだか気持ち

悪くて胸が痛いように思いました。

そこへ丁度度十の兄さんが畑から帰ってやって来ましたが林を見て思わず笑いました。そしてぼんやり立っている度十にきげんよく云いました。

「おう、枝集めべ、いい焚たぎものうんと出来だ。林も立派になつたな。」

そこで度十もやつと安心して兄さんと一いっしょ緒に杉の木の下にくぐつて落した枝をすつかり集めました。

下草はみじかくて奇麗きれいでまるで仙せん人たちが碁ごでもうつ処のように見えました。

ところが次の日度十は納屋で虫喰むしくい大豆まめを拾っていましたら林

の方でそれはそれは大きわぎが聞えました。

あつちでもこつちでも号令をかける声ラツパのまね、足ぶみの音それからまるでそこら中の鳥も飛びあがるようなどつと起るわらい声、度十はびっくりしてそつちへ行つて見ました。

すると愕おどろいたことは学校帰りの子供らが五十人も集つて一列になつて歩調をそろえてその杉の木の間を行進しているのです。

全く杉の列はどこを通つても並木道なみきみちのようでした。それに青

い服を着たような杉の木の方も列を組んであるいているように見えるのですから子供らのよろこび加減と云つたらとてもありません、みんな顔をまっ赤にしてもずのようにさけ叫んで杉の列の間を歩いているのでした。

その杉の列には、東京街かいどう道ロシヤ街道それから西洋街道というようにずんずん名前がついて行きました。

度十もよろこんで杉のこっちにかくれながら口を大きくあいてはあはあ笑いました。

それからもう毎日毎日子供らが集まりました。

ただ子供らの来ないのは雨の日でした。

その日はまっ白なやわらかな空からあめのさらさらと降る中で度十がただ一人からだ中ずぶぬれになって林の外に立っていました。

「度十さん。今日も林の立番だなす。」

みの蓑を着て通りかかる人が笑って云いました。その杉にはとびいろ鳶色

の実がなり立派な緑の枝さきからはすきとおったつめたい雨のしずくがポタリポタリと垂れました。度十は口を大きくあけてはあはあ息をつきからだからは雨の中に湯気を立てながらいつまでもいつまでもそこに立っているのです。

ところがある霧きりのふかい朝でした。

度十は萱場かやばで平二といきなり行き会いました。

平二はまわりをよく見まわしてからまるで狼おおかみのようないやな顔をしてどなりました。

「度十、貴さんきどこの杉伐きれ。」

「何なしてな。」

「おらの畑あ日かげにならな。」

度十はだまって下を向きました。平二の畑が日かげになると云ったって杉の影がたかで五寸もはいつてはいなかつたのです。おまけに杉はとにかく南から来る強い風を防いでいるのでした。

「伐れ、伐れ。伐らないが。」

「伐らない。」度十が顔をあげて少し怖こわそうに云いました。その唇くちびるはいまにも泣き出しそうにひきつっていました。実にこれが度十の一生の間のたった一つの人に対する逆らいの言ことばだったので。ところが平二は人のいい度十などにばかにされたと思つたので急に怒おこり出して肩を張つたと思うといきなり度十の頬ほおをなぐりつけました。どしりどしりとなぐりつけました。

度十は手を頬にあてながら黙だまつてなぐられていました。がとうと

うまわりがみんなまつ青に見えてよろよろしてしまいました。すると平二も少し気味が悪くなつたと見えて急いで腕うでを組んでのしりのしりと霧の中へ歩いて行ってしまいました。

さて度十はその秋チブスにかかつて死にました。平二も丁度その十日ばかり前にやつぱりその病気で死んでいました。

ところがそんなことには一向構わず林にはやはり毎日毎日子供らが集まりました。

お話はずんずん急ぎます。

次の年その村に鉄道が通り度十の家から三町ばかり東の方に停車場ができました。あちこちに大きな瀬戸物せとものの工場や製糸場ができました。そこらの畑や田はずんずん潰つぶれて家がたちました。い

つかすつかり町になってしまったのです。その中に度十の林だけはどう云うわけかそのまま残って居りました。その杉もやつと一丈ぐらい、子供らは毎日毎日集まりました。学校がすぐ近くに建っていましたから子供らはその林と林の南の芝原とをいよいよ自分らの運動場の続きと思つてしまいました。

度十のお父さんももうかみがまつ白でした。まつ白はずな筈です。

度十が死んでから二十年近くなるではありませんか。

ある日昔むかしのその村から出て今アメリカのある大学の教授になっている若い博士が十五年ぶりで故郷へ歸つて来ました。

どこに昔の畑や森のおもかげがあつたでしょう。町の人たちも大ていは新らしく外から来た人たちでした。

それでもある日博士は小学校から頼まれてその講堂でみんなに向うの国の話をしました。

お話がすんでから博士は校長さんたちと運動場に出てそれからあの度十の林の方へ行きました。

すると若い博士は愕おどろいて何べんも眼鏡めがねを直していましたがとうとう半分ひとりごとのように云いました。

「ああ、ここはすっかりもとの通りだ。木まですっかりもとの通りだ。木は却かえって小さくなったようだ。みんなも遊んでいる。ああ、あの中に私や私の昔の友達にわが居ないだろうか。」

博士は俄にわかに気がついたように笑い顔になって校長さんに云いました。

「ここは今は学校の運動場ですか。」

「いいえ。ここはこの向うの家の地面なのですが家の人たちが一向かまわないで子供らの集まるままにして置くものですから、まるで学校の附属ふぞくの運動場のようになってしまうましたが実はそうではありません。」

「それは不思議な方ですね、一体どう云うわけでしょう。」

「ここが町になってからみんなで売れ売れと申したそうですが年よりの方がここは度十のただ一つのかたみだからいくら困ってもこれをなくすることはどうしてもできないと答えるそうです。」

「ああそうそう、ありました、ありました。その度十という人は少し足りないと思っていたのです。いつでもはあはあ笑っ

ている人でした。毎日丁度この辺に立つて私たちの遊ぶのを見ていたのです。この杉もみんなその人が植えたのだそうです。ああ全くたれがかしこくたれが賢かしこくないかはわかりません。ただどこまでも十じゅうりき力の作用は不思議です。ここはもういつまでも子供たちの美しい公園地です。どうぞでしょう。ここに度十公園林と名をつけていつまでもこの通り保存するようにしては。」

「これは全くお考えつきです。そうなれば子供らもどんなにしあわせか知れません。」

さてみんなその通りになりました。

芝生しばふのまん中、子供らの林の前に

「度十公園林」と彫ほった青い橄欖岩かんらんがんの碑ひが建ちました。

昔のその学校の生徒、今はもう立派な検事になったり将校になったり海の向うに小さいながら農園を有^もったりしている人たちから沢^{たくさん}山の手紙やお金が学校に集まって来ました。

度十のうちの人たちはほんとうによろこんで泣きました。

全く全くこの公園林の杉の黒い立派な緑、さわやかな匂^{におい}、夏のすずしい陰^{かげ}、月光色の芝生がこれから何千人の人たちに本当のさいわいが何だかを教えるか数えられませんでした。

そして林は度十の居た時の通り雨が降ってはすき徹^{とお}る冷たい雫^{しずく}をみじかい草にポタリポタリと落しお日さまが輝^{かがや}いては新らしい奇麗な空気をさわやかに引き出すのでした。

青空文庫情報

底本：「新編風の又三郎」新潮文庫、新潮社

1989（平成元）年2月25日発行

1989（平成元）年6月10日2刷

入力：蔣龍

校正：noriko saito

2008年10月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

度十公園林

宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>